

ふくふくファンド（宮城労福協社会貢献活動基金）  
2010年度 助成事業報告書

2011年 4月 30日

団体名（ふりがな） World Open Heart(ワールドオープンハート)

事業名 犯罪加害者家族支援を考えるシンポジウムの開催

1. 実施事業の内容

助成金を使って行った事業について、記述してください。

◆シンポジウム「犯罪に巻き込まれた人々のケア第2弾！～犯罪加害者家族支援を考える～」開催

日時:2011年3月5日(土)10:00～17:00

会場:仙台市市民活動サポートセンター

参加費:無料

主催:人権NPO World Open Heart

協力:NPO法人フェアトレード東北、NPO法人仙台ダルク、NPO法人ワンファミリー仙台、非行と向き合う親たちの会リレーションシップ・みやぎ、Anego、まちづくり・ACT・いしのまき

☆目的:石巻DV殺人事件、仙台高校教師殺人事件など、宮城県内で全国を震撼させるような犯罪が起きている。その影響は、被害者と加害者、そしてその家族にとどまらず地域全体にまで及んでいる。こうした犯罪が発生したとき、専門家や市民団体、そして個人に何ができるのかを考える機会を作りたいと考えた。WOHが、支援の対象としている可視化されていなかったマイノリティである「加害者家族」。英語ではしばしば、hidden victim 隠された被害者 forgotten victim 忘れられた被害者と呼ばれる。加害者家族支援から、さらに「忘れられた被害者」の存在が明らかとなった。家族間犯罪の場合、ひとつの家族に加害者と被害者が存在することになる。つまり、加害者家族であると同時に被害者家族でもある。それにもかかわらず、被害者支援の対象から外れているところが多い。支援の対象から毀れる人々を作らないための支援の在り方についても社会に問題提起したいと考えた。

◆ 内容

第1部 シンポジウム 10:00～12:00

会場:仙台市市民活動サポートセンターセミナーホール

テーマ:「家族間犯罪～被害者と加害者の間で」

参加者数:約80名

内容(1)WOHの加害者家族支援

報告者:阿部恭子(WOH代表)

コメンテーター 長尾浩行(WOH顧問 弁護士)

伊藤美奈(WOH顧問 精神保健福祉士)

報告内容:\*添付資料参照

○ 長尾先生からのコメント

WOHの特徴は、事件発生から出所後までフルサポートできるところにある。事件発生後すぐなのか、裁判が始まっているのか、すでに本人が刑務所に入っているのか、段階によって家族が抱える悩みが異なる。どの段階にも対応できるようなサービスを充実させることは重要である。

WOHの意義として、弁護士が業務の中でカバーできない範囲のサービスを提供できるという点が挙げられる。実際、弁護士は契約者が家族である場合であっても、本人のために行動することが任務であり、家族のケアはどうしてもこの次になる。そこを団体がフォローしてくれることは、弁護士にとっても助かるサービスである。

○ 伊藤先生からのコメント

触法精神障害者家族の支援についての解決事例を紹介。精神障害者が犯罪を繰り返しているケースは決して少ない事例ではないが、犯罪を犯した場合、職業訓練などの受け入れ先の反応も悪く、行き場がなくなり家庭で引き受けている家族の負担は相当大きいものである。どうしてよいのかわからず追いつめられていた家族であっても、上手く支援先と繋がることで本人も家族も回復できるケースが存在する。加害者本人が良くなることは、家族の安定にも繋がる。

(2) パネルディスカッション「家族間犯罪」

コーディネーター: 阿部恭子

パネリスト: 長尾浩行、伊藤美奈 (WOH顧問)

佐藤わか子氏 (ワンファミリー仙台副理事長)

若島孔文氏 (東北大学大学院教育学研究科准教授 臨床心理学)

勝田亮氏 (弁護士)

内容: 加害者家族でもあり、被害者家族でもある親族間犯罪者家族のように、支援の隙間から毀れるような人々を作らないために何ができるか。

☆ 佐藤氏からのコメント

市議員として自殺対策に取り組んできた。自殺者が3万人を超えることから、全国的にさまざまな活動が行なわれているが、まず優先させなければならないことは、シンポジウムの開催などに費用と時間を費やすのではなくて、困っている人にいち早く情報を届けるために支援先のパンフレットを置くなどの当事者への情報提供が必要である。仙台では、ワンストップサービスなど総合相談所を開設しており情報の一元化に努めている。

☆ 勝田氏からのコメント

少年事件に関わった経験から、少年の立ち直りを支援する活動に従事してきた。犯罪を犯した人々が社会復帰できるようになるためには、家族の支援も重要であり、それを受け入れる社会のあり方も問われる。最近では、DV事件も多く扱っており、DVの場合も夫が逮捕されれば被害者であると同時に加害者の家族でもある。加害者や被害者そしてその家族という立場は、誰でもなりうる可能性があることから当事者意識を持つことが重要である。

☆ 若島氏からのコメント

家族療法を用いたカウンセリングをしており、神奈川県の子供支援センターの設立にも関わった。家族を対象としていることから、家族間犯罪のようなケースをカウンセリングした経験もあり、加害者と被害者とは、容易に線引きできない関係にある。

家族の問題について、子どもが犯罪を犯したような場合、すべてを成育歴と結びつけて非難する風潮には違和感を感じる。東北大学では、最近、児童相談所と連携して家族再統合のプロジェクトを進めている。



第2部 分科会 13:00～16:00

分科会1 リレーションシップみやぎ

会場:研修室5

テーマ「子どもの自立・親の自立」

講師：大塚憲治氏（母子支援施設施設長）

参加者数：約 30 名

分科会2 MCR家族支援センター

会場：研修室2

テーマ「発達障害の家族支援」

講師：斉藤暢一郎氏

参加者数：約 30 名

第2部 シンポジウム「犯罪者が社会復帰に至るまで」 14:00～16:00

コーディネーター 勝田亮氏（弁護士）

パネリスト 飯室勉氏（仙台ダルク代表）

新沼鉄也氏（ワンファミリー仙台）

阿部恭子（World Open Heart）

参加者：約 30 名

内容：犯罪者の社会復帰を家族がどのように支えるか。仙台ダルクの飯室氏は当事者として、加害者本人の気持ちをストレートに話してくれていた。また、阿部恭子代表は加害者の家族が抱える思いや本人とのギャップについて語り、「当事者」と「家族」との両方のアプローチが必要であるというひとつの結論に達した。また、当事者と家族の責任で終わらせるだけでなく、そのような支援を受容する社会のあり方について、ホームレスを支援する新沼氏から孤立させない社会という提案も出された。



第3部 基調講演「ブリーフセラピー～太陽の法則～」



東北大学大学院教育学研究科 若島孔文准教授

## 2. 事業の成果

今回の事業によって、どのような成果・効果がありましたか。

### (1) 犯罪加害者家族支援の認知度の向上

当日は、弁護士や心理職・福祉に関わる人々、法学部の学生など約 80 名の参加者が会場を訪れた。マスコミ各社も取材をしており、当日の内容は、次の日の河北新報、産経新聞、読売新聞などで大きく取り上げられた。

### (2) 関連団体との連携強化

フェアトレード東北、リレーションシップ・みやぎなど普段から付き合いのある団体のほかに、ワンファミリー仙台や仙台ダルク、MCR 家族支援センターと共同事業を行なうことによって、団体の活動内容を具体的に知ることができ、情報交換と相談者の紹介が可能な関係を築くことができた。

### (3) 相談者へより具体的な情報を提供

実際、若島先生のセラピーの方法や効果について講演を聴くことによって具体的なイメージが湧き、カウンセリングを受けることに繋がったケースがあった。パネリストとしてご参加いただいた団体や弁護士などの専門家についても同じことが言えると思う。顔を見て話を聞くことにより、人となりを感じることができ、何か問題を抱えたときに専門家と繋がることができるという心理的距離が近くなったという意見がアンケートで寄せられていた。

## 3. 今後の展開

今回の事業を、今後どのように展開していきますか。その際に必要なものは何ですか。

### (1) 今後の展開

今回のシンポジウムは、人権NPOWorldOpenHeart とフェアトレード東北が共同で行なっているシリーズ「犯罪に巻き込まれた人々のケア」の第二回目の企画であり、初回以上の参加者数を記録した。シンポジウムを重ねるにつれて、相談者や支援者が増えてきている。第三弾は、今回テーマとなった加害者家族支援のなかでも「家族間犯罪」を掘り下げ、被害者支援と加害者家族支援の類似性と必要性、連携のあり方について考えるシンポジウムを開催予定。「犯罪に巻き込まれた人々のケア～修復的司法の実践～」パネリスト:草場裕之弁護士、勝田亮弁護士など予定。WOH の究極の目的でもあるマジョリティとマイノリティの対話、被害者と加害者の共生の可能性を考える機会に発展させたい。

### (2) 第 3 弾開催に向けての課題

#### (1) 犯罪に巻き込まれた人々のケア実行委員会の再結成

今回のシンポジウムは結果的に成功を収めたが、準備期間が十分ではなかった。第三弾では、余裕を持って半年前から関係者に声がけをし、実行委員会を形成して勉強会を重ねながら本番に臨みたい。

#### (2) 全国ネットワークの活用

今回は、加害者家族支援団体が連携すべき宮城県内のネットワーク団体を中心だった。しかし、ダルクはすでに全国的な組織であり、MCR 家族支援センターも関東が本拠地である。しかがって、次回は全国的なネットワークを活用し、日本全体の動向について考えるシンポジウムを仙台で行いたい。

4. 助成金の使途内訳（具体的に記入してください）

**収入の部**

項目	金額（円）	内訳
ふくふくファンド助成金	100,000円	
団体負担金	1,120円	寄付金
合計	101,120円	

**支出の部**

項目	金額（円）	内訳
会場費	6,000円	仙台市市民活動サポートセンター研修室2（400円×5h＝2000円）研修室5（800円×5h＝4000円）
講師謝金	80,000円	基調講演講師 若島氏（3万） パネリスト 勝田氏（1万） 新沼氏（1万） 飯室氏（1万） 分科会担当団体 MCR（1万） 非行の会（1万）
印刷製本費	15,120円	チラシ1万枚
合計	101,120円	

## 5. メッセージ

宮城労働者福祉協議会へのメッセージをご記入ください。

「犯罪加害者家族支援」という論争を招きかねないテーマのシンポジウムに出資していただいたことを心より深く感謝いたします。おかげさまで、多くの参加者とマスコミの関心と呼び、さらなる支援の拡大に結びつきました。

WOHは、これからも「忘れられている被害者」の可視化に力を注ぎ、より多くの人々の理解を得られるように日々精進していきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。